

2021年9月21日（火）

老球の細道631号

58回県高等学校バスケットボール選手権大会会津地区予選雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

相変わらず続くコロナ禍で、他地区が中止でもわが会津地区においては、協会、高体連関係者の尽力によって今大会を無事開催することができた。たとえ無観客試合といえども、東京五輪の盛り上がりや冷めないよう、活動を継続することは大切なことだと思う。

色々な制限のある中で大会開催でアップセットが起こった。今まで男子13年連続、女子11年連続優勝を誇っていた名門若松商業高校が男女共決勝で敗れた。若松商業には申し訳ないが、色々な学校が優勝できるということは、今後の会津地区の活性化、レベルアップに役立つのではないだろうか。そして若松商業は今回の敗戦を契機に、原点に戻ってチームを立て直し、県大会、新人大会ではさらに一皮むけた名門若松商業となってコートに戻って来てほしい。敗戦の悔しさ、惨めさは人間を強くするチャンスだと名将たちは語っている。

男子優勝の会津工業は18年ぶりの優勝であった。かつて若松商業で地産地消の選手達で見事に全国大会（インターハイ、ウインターカップ）出場を果たした名将阿部哲先生の復活にエールを送りたい。小粒のチームであるが、スピード、ルーズボール、リバウンドボールに優れ、ここぞというときの1:1の突破力は地区内では群を抜いていた。

一方、女子優勝の会津高校は15年ぶりの優勝であった。今までも新人、高体連、総体などでは優勝はしていたが、この選抜大会は3年生が抜けてしまうためにどうしても勝てなかった。しかし、今回は優秀な1年生の加入と活躍により、苦しいゲーム展開であったが僅差でアップセットを果たすことができた。まさに試合はやってみないとわからない。

日本バスケットボール協会技術委員長の東野智弥氏は今回の東京五輪日本代表チームを総括して、朝日新聞に「男子はようやく世界の土俵に上がった。女子は世界と勝負ができるようになった」という論評を掲載していた。まさしく会津地区も県大会においてはそのような状況ではないだろうか。

日本のバスケットボールの課題は4つあると昨今言われ続けている。会津地区の課題もまさに同じである。ミニから高校までカテゴリーの区別はない。①アウトサイドシュートの確率向上②状況判断③コンタクトに負けない④シュートフィニッシュ（ディフェンスのプレッシャー下でシュートを決め切る）。これから県大会、新人戦まで、毎日の練習ドリルにこれらの要素を組み入れた内容で練習してほしい。

最後に、閉会式でも話をしたが、1964年の東京五輪に日本代表で出場し、その後1976年モントリオール五輪では代表コーチを務めた坂下町出身の江川嘉孝（会津高校に1年間在籍）氏は今回の大会を観戦するために千葉から会津へ帰省する予定だった。コロナのために実現できなかったが、電話で私にこう話した。「会津の高校生に伝えてください。ルーズボールをがんばれと」。五輪に選手とコーチで出場したのは日本バスケットボールの歴史の中で江川氏一人である。そのような人でも言うことはシンプルである。